

—— 人生の岐路 ——

今回は私の人生の岐路について書きたいと思う。

岡山県立津山高校入学時、私は、将来、農業科学者になることを思い描いていた。幼少時より、両親が田畑でコメやトマト・きゅうりを育て、山から木を伐り出して生活するのを目の当たりにしていたせいか、農業科学の進歩により、農業を強く

私の歩んだ道

小林 元浩

③

して、農家の生活を豊かにしたいと考えていたのだ。さらに、中学3年生の時、いわゆる「減反政策」が始まった。米作をやめることで奨励金を出すという施策は、自分たちの生活を支えてくれた「田」を否定せよという自己矛盾に満ちていた。日本が繁栄する基盤となるべき農業を、日本の政策で弱らせてよいのだろうか、強い農業とは何か、勝てる農業とは何か、そんなことを思いめぐらせた私は、

高校で理科系を選択し、農業科学に人生を捧げる思いであった。

そんな私を変える転機が訪れる。「学生闘争」である。時は、1969年。東大では安田講堂事件が起きた。1960年代後半からベトナム戦争が激化の一途をたどる中で、1970年で期限



岡山県津山高等学校・校訓碑前にて
(H17.11.12)
鳥取市での第48回人権大会後、実家に帰省した際
立ち寄った

の切れる日米安全保障条約の自動延長を阻止・廃棄する動きと共に、学生によるベトナム反戦運動、第二次反安保闘争が活発化していた。その中で象徴的な事件が安田講堂事件であった。その様子は日々テレビで生中継されていた。社会の変革を闘争に訴えた若者

が、機動隊によって力で鎮圧されていく姿は、若き自分らにも衝撃的であった。この東京の学生闘争のうねりは全国の地方都市にも波及し、津山市の田舎学生であった私も下宿先の仲間たちと、「世界」や「朝日ジャーナル」(1992年廃刊)といった雑誌を手に「どう生きるべきか」「国はどう在るべきか」と夜中まで熱い議論を交わした。一般教養を学ぶ高校の授業が馬鹿らしく感じて成績が急降下する一方で、「社会変革が満ちる中で社会に接点を持つ仕事に就きたい」と湧き上がる思いを抑えきれず、親には内緒で理系から文系にコース変更をした。高校2年の時である。

その頃、私は、こっそりと一人東京へ上京もしている。新聞や雑誌で読む世界をこの目に焼き付けたいと考えたからである。新宿駅西口では、多数の学生が集まって、フォークソングやベトナム反戦歌を歌っていた。ほとぼるの熱量に、心が高揚していくのを感じた。戦後の平和を謳歌していた若者達が、アメリ

カの覇権戦争に日本が組み入れられる姿をベトナムの惨禍で目の当たりにして、改めて憲法という平和とは何か、人権とは何か、命をかけて問いかけていた時代であった。

そのような中、私は、力に訴えるのではなく、研究室にこもるのでもなく、「法律」のとの関わりを通して平和や人権を守り、社会を改善・変革するものとして「法曹」の道に進むことに心を決めた。

こうして迎えた大学受験。早稲田大学の法学部と中央大学法学部から合格通知を頂戴したが、早稲田大学は学費が高額で行けなかった。進学した中央大学では、学費値上げ反対など、学生運動による改革に向けた熱気がまだ冷めやらなかった。学校が封鎖されて勉強さえできない状況で、田舎出身の私が司法試験受験のために頼りにしたのが、学術研究団体の一つ、「玉成会」であった。ここでの素晴らしい先輩・後輩との出会いが、その後の法曹としての人生に彩りを与えてくれることになる。